

輸液ポンプのトラブルシューティング時における学士課程 4 年生の思考過程

—臨床看護師の対応を見て—

占部美恵、光木幸子、毛利貴子、眞鍋えみ子、岡山寧子

(京都府立医科大学医学部看護学科)

【目的】A 大学には、看護実践能力の向上をねらいとした授業「看護の統合と実践」の中に「ME 機器の理論と操作」の単元がある。これは、ME 機器の基本的知識の講義、演習および臨床看護師による対応のシミュレーションで構成し、その目標の一つは「輸液ポンプ施行中の必要な観察点や患者の状況判断を記述できること」である。本研究は、ME 機器の中でも就職後すぐに対応が求められる輸液ポンプ施行時の観察やアセスメント内容を明らかにし、今後の授業の指針を得ることを目的とした。

【研究方法】平成 23 年 11 月に本授業を受講した A 大学の 4 年生に対して、研究目的及び方法、匿名性の保障、研究に協力しなくても成績に一切関係がなく不利益を被らないことを説明し、同意が得られた 32 名 (100%) を対象とした。学生は、臨床看護師による輸液ポンプ使用時にアラーム音が鳴った際の対応のシミュレーションを見学した後、観察項目、アセスメントについて自由に記載した。分析は、2 名の研究者により類似した記述内容を整理し、学生数における記述数の割合を示した。

【結果】観察における記述の総数は 146 例で、16 項目にまとめられた。それらは、ラインの屈曲 17 例 (53.1%) やクレンメの開閉 13 例 (40.6%) などのラインに関する 9 項目、刺入部位の観察 28 例 (87.5%) や逆流の有無 6 例 (18.8%) など刺入部に関する 3 項目、アラームの表示 13 例 (40.6%) や輸液ポンプの設定 3 例 (9.4%) など輸液ポンプに関する 3 項目、患者の状態 18 例 (56.3%) の 1 項目だった。学生が最も多く記述した項目は刺入部の観察で、その他は 3.1~56.3% と記述率は低かった。学生 1 名の記述数の平均は 4.6 (SD = 1.5) 例であった。アラーム音の原因のアセスメントの正解者は 23 名 (71.9%) であった

【考察】アセスメントの正解率、観察点の記述率の低い項目があったことから、授業目標の達成には十分に至っていないことが明らかになった。今後、講義で説明するだけでなく、演習にトラブルシューティング時の対応や看護場面を実際に経験するプログラムを加えるなど、臨床看護師のシミュレーションを見学する場面で知識や技術を統合し、それを学生自身も確認する場とする授業の組み立てが課題と考えられた。(本研究は文部科学省平成 21 年度助成事業「看護職キャリアシステム構築プラン」の一部である。)